

保育実践に生かすドキュメンテーション

—ドキュメンテーション作成の試みから見えてきたもの—

山口舞・小谷佳苗・日下部弘美（日本女子大学附属豊明幼稚園）・請川滋大（日本女子大学）

【研究の目的と方法】（請川）

2016年度から、附属豊明幼稚園の園内研修会年に数度お伺いしている。その中で写真を効果的に活かしたドキュメンテーション（教育的ドキュメンテーション）の取り組みを紹介したところ、2016年当時、年中組を担当していた3人の先生方（今回の発表者）がさっそく取り組みを始めてくれることとなった。作成し始めた頃は写真が小さかったり、全体の中で文字が多くたりと見る側にとっては分かりづらい側面もあったのだが、短い期間でずいぶんと工夫がなされ、現在は子どもたちや保護者も意識的に見るようなドキュメンテーションに仕上がっている。

今回の発表では、年長の担任となった3人の先生方の取り組みを振り返りながら、ドキュメンテーション作成に当たってどのような点が困難だったのか、それらをどう工夫してきたのかについて報告したい。また、ドキュメンテーションは作成することに目的があるのではなく、それらを通してどのように保育が変わっていったのかが重要であるため、ドキュメンテーション作成とその掲示を通して変化してきた子どもの姿についても触れていくたい。園児は保育者が作ったドキュメンテーションに目をとめるようになり、自分たちでもドキュメンテーションを作成するようになった。その背景には、「自分たちの生活を意識して見る」ということがあるように感じる。のような子どもたちの様子もお示しできればと考えている。

【日本女子大学附属豊明幼稚園について】（日下部）

本園は、「遊びを中心とした保育」「感性をはぐくむ保育」を創立以来受け継いでいる。子ども達は木々や虫など自然豊かな環境の下、自らの興味の赴くまま様々な遊びを楽しんでいる。

私達の学年では、昨年度から日々の記録としてドキュメンテーションを作成し、保護者向けに学期に数回これらを掲示している。また、子ども達がお互いの遊びを見合えることが困難であることを鑑み、子ども用に編集し、情報発信を始めた。

【ドキュメンテーションを始めてぶつかった壁】（小谷）

写真を活用してドキュメンテーションを作成し、日々の記録をとることにした一人担任一年目。学年で記録を見合い話し合う中で、他の教員からの指摘から自らの様々な課題が見えてきた。

＜ぶつかった壁＞

まずは、一人ひとりがどこで何をして遊んでい

るか全体を把握すべく、手当たり次第撮影していたため、写真の量が大量になってしまった。保育後写真を見ながら記録をとろうとするが、大量の写真を取捨選択できず相当量の時間を要していた。写真を撮ることばかりに気を取られ、子ども達が何を経験していたのか個々の姿が追えず、実際の様子がよく理解できていなかった。さらに、記録をとるにあたっては、どこでどんな遊びが展開されたかのみの単なる記録になっていた。子どもの言葉、結果、感想で終わってしまい、保育者のねらいや意図の記述が不十分のため、遊びが続いているかなどもあった。また、何を伝えたいのかポイントが絞れず、文字数が多くなり見難い記録となっていた。

以上のような壁を克服すべく、まずは初心に戻り、子ども達が“経験していることは何か”、そこに焦点を絞り、写真の撮影も控え、じっくり遊びに関わることにした。時には他クラスの担任に他の遊びの子ども達を見てもらいながら、目の前の子どもと向き合うことに専念していった。

＜じっくり関わることで見えてきたこと＞

一人ひとりがつまずいている課題が見えてきた。普段自分から遊びを始めて一見遊んでいるように見えていた子どもが、実は特定の友だちがいないと遊びが見つけられず行き詰っていることにも気付いた。

記録に残して伝えたい場面が見えてくると次第に写真を撮る回数が抑えられ、写真を選ぶ時間も短縮されていった。そこで、“どんな経験が必要か”、そのためには“必要な環境構成は何か”という視点で記録をとり、保育者としての意図やねらいも書くよう心掛けていた。さらにその場面でのキーワードを括り出し、焦点を絞って書いていくと、伝えたいことが自分の中でも整理され、記録を見返した時に見やすく理解しやすいようになってきた。

【保育実践に生かすドキュメンテーションを目指して】（山口）

ドキュメンテーションで記録を続けていく中で、子どもの成長や思いに気付くきっかけとなり、次の保育に繋げていく楽しさを感じられるようになってきたところである。

今年度、5歳児クラス24名の担任をしている。4歳児より持ち上がりのクラスであり、昨年度は紙粘土でのカップケーキ屋さんやパン屋さんの遊びを気に入って行っていた。また学年末には年長児の卒園プレゼントとして紙粘土でペン立て

を作った。紙粘土に繰り返し触れる機会のあった一年間であった。

5歳児進級当初、4歳児でしていた遊びを繰り返す姿が見られた。その一つに紙粘土のカップケーキ屋さんも挙げられた。しかし色々な素材に触れながら経験が広がっていくことを願い、あえて子ども達に紙粘土を提供しないこととした。そこで自分達で粘土が作れないだろうかと考え始めた子ども達。その展開をドキュメンテーションにまとめていくことで、どのように保育実践に生かされていったかを、事例を通して紹介していく。

<事例 粘土作りをしよう(5歳児クラス4月)>

保育者に「紙粘土はない」と言われたA児は、イチゴを作るにあたり赤い和紙と花紙を水に浸し始める。「これで粘土みたいになると思う」水に浸したまま一日置いてみるが、粘土のようにはならなかつた。粘土みたいにするにはどうすればよいのか家で調べてきたA児は「小麦粉が必要!」と言う。園にあった小麦粉を出すと、徐々に興味をもつ子どもが増え始め、小麦粉粘土作りが始まった。しかし分量がわからず作っているのでベチャベチャ。他のものを混ぜ始めたり、冷凍庫や冷蔵庫に入れてみたり、粘土らしい硬さに近づけようと数日間試行錯誤するものの、なかなかうまくいかず諦め始める。

そこへ「水が多すぎるんだよ!」と気づいたB児は小麦粉と水のみで粘土を完成させて見せた。それをきっかけに他の子ども達も再び挑戦。次々に粘土が出来上がる。ようやくできた粘土が嬉しくて、丸めたりこねたりしながら何日も大切に持っている子ども達。しかし徐々に「なんか変な臭いがする…」ということに気づき始める。

<ドキュメンテーションの効果>

・保育者の記録として

小麦粉粘土が腐ることに気づいた子ども達は、腐らない土での粘土作りに着目する。興味が広がり始めた子どもの動きを逃さずにキャッチできたのはドキュメンテーションによる記録の効果と言える。粘土作りの展開と子ども達の気づきを日々追いかけてドキュメンテーションを作成していくと、その出来事や自分の思考が整理されていく。まとめながら可視化することで、その活動の今後の可能性や次の子どもの動きなどが想起されていく。その上で、明日の援助が自分の中で意識化される。また複数の展開を予想することで、きっかけがあった際に子どもの声や動きを逃さずに拾うことができる。一見、見落としがちな子ども達の遊びの連続性が見え始めてくる。

・保育者間の情報共有

ドキュメンテーションを学年で共有することにより、担任だけでは気づかなかつたことに気づいたり、その遊びを支えるよう助け合ったりすることができる。環境構成や教材準備などをクラス

単位ではなく、学年単位で総合的に整えていくことができる。担任だけの思考に留めずに、子どもの動きを多角的に予想することで、長期的な保育計画にも繋がっていく。クラス間での刺激から子ども達の経験が広がるきっかけも増えていく。

・子ども達への発信

自分がしていた楽しかった遊びが掲示されていると、それを見て喜び、再び遊びを繰り返す姿が見られる。また小麦粉粘土の事例においてはその他の効果も感じられた。一つ目は自分達でもドキュメンテーションを作ることができることである。子ども達が工夫し考えて作り上げた小麦粉粘土の作り方に関する掲示を、保育者ではなく自分達で作成してみてはどうかと思い、提案した。すると自分達で写真を選び、保育者の手を借りずともその時の展開を書き、心情を吹き出しで書き始めた。二つ目は、遊びに入ることをためらっていた子どもが入るきっかけとなったことである。保育者が作成した小麦粉粘土に関するドキュメンテーションの掲示は、中心となって行っている子どもは毎日小麦粉粘土に夢中であまり見ていない印象があった。一方で、興味はあるがやることをためらっていた子どもはよく見ていた。その子どもは様子を見て、日をおいて参加していた。

【その後の展開と課題】(山口)

・色々な粘土に触れて

小麦粉粘土から始まった粘土作りは、その後土粘土、新聞紙粘土へと広がっていく。徐々に粘土を作るだけでなく、レストランごっこなどで作ったものを使って遊ぶ姿も見られるようになっていった。また色々な粘土に触れることでそれぞれの粘土の特性にも気づき始めた。学期末には年長組だけの特別な行事、夏の保育に粘土コーナーを設けることとした。子ども達と何をするか相談した結果、粘土で自分の好きな作品を一つ作り、粘土博物館を行うことになった。夏の保育は保護者のご協力も得ながら行っていく。ドキュメンテーションは保育記録に生かすことを目的に作成してきたが、保護者に対しても時折発信してきた。その効果もあり、保護者もこれまでの粘土遊びの流れを汲み色々な粘土に挑戦しながら粘土博物館を盛り上げていった。

・それぞれの興味

一学期を通して行った粘土であるが、好奇心をもって次々と探求していく子どもがいる一方で、なかなか興味を示さない子どももいる。保育者にとって盛り上がっていると感じる遊びには、一人でも多くの子どもに経験してほしいと願ってしまう。しかしすべての子どもが経験するべきなのかという葛藤もある。一人ひとりの子どもにとつて盛り上がっている遊びは違い、興味をもち始めるタイミングも違う。その中で育つ姿も見逃さず、それぞれの姿を焦らずに認めていくことが必要である。ドキュメンテーションによる記録としての効果的な部分を生かすことで、長期的な視野をもちながら今後も日々の保育実践につなげていけるよう努めていきたい。